

筑波学院大学は、日本国際学園大学に生まれ変わります



2024年4月、茨城県、宮城県で待ち望まれた「国際・語学系大学」ついに開学！
国際教養、英語に加え、未来と繋がる公務員・ビジネス・AI・情報・コンテンツデザインの学び

日本国際学園大学4年間の学び JIU モデル

詳細はこちらから



本学では、国際性・語学力を高めながら、就職を見据えた多彩な実践教育を行います。その教育カリキュラム体系を本学では「JIU モデル」といい、目指す職種ごとにモデル別のカリキュラムに沿って学びます。

※「JIU」とは、「日本国際学園大学/JAPAN INTERNATIONAL UNIVERSITY」の略称です。



つくばキャンパス
TSUKUBA campus

- 国際教養 (グローバルキャリア、大学院進学)モデル
- 英語コミュニケーションモデル
- 現代ビジネス (企業総合職、地域づくり、経営者、起業家)モデル
- 公務員 (行政職、警察官、公的サービス)モデル
- AI・情報 (DX、ウェブデザイナー、プログラマー、データアナリスト)モデル
- コンテンツデザイン (グラフィック、イラスト、動画、アニメーション)モデル
- 日本文化・ビジネス (外国人学生・留学生対象)モデル



仙台キャンパス
SENDAI campus

- 国際教養 (グローバルキャリア、大学院進学)モデル
- 英語コミュニケーションモデル
- 現代ビジネス (企業総合職、地域づくり、経営者、起業家)モデル
- 国際エアライン (CA、グランドスタッフ)モデル
- 国際ホテル (フロントサービス、料飲、ホテル総合職)モデル

多彩な学びを通して人間力、国際力、社会力をもった学生の幸せな人生をサポートします

令和6年度(2024年度) 日本国際学園大学
オープンキャンパス日程を公開しています

公式HPにて随時公開中！▶▶▶



発行：筑波学院大学 21 世紀型教育研究所
発行日：2024 年 3 月
住所：〒305 - 0031 茨城県つくば市吾妻 3 丁目 1 番地
電話：029 - 858 - 4811 (代表)

つくば21C教育フォーラム

筑波学院大学 21 世紀型教育研究所報 第 8 号

21世紀型教育研究所長
学 長 望月 義人



筑波学院大学の学生による学外活動紹介
高等学校での授業サポート
経営情報学部4年 飯島 綾乃

つくば21世紀教育フォーラム特集
絵画を通じて世界情勢について考える

経営情報学部1年
ウクライナ人留学生 トロプチン ニキタ
講 師 野田 美波子



授業研究会報告

筑波学院大学
TSUKUBA GAKUIN UNIVERSITY

21世紀型教育研究所長 筑波学院大学 学長 望月 義人



「21世紀型教育」 の追究を願って

筑波学院大学は、2024年4月1日、大学名称を「日本国際学園大学」に変更します。同時に仙台市にも仙台キャンパスを新設し、2キャンパス制となります。

本学は、1990年に東京家政学院筑波短期大学として開学、その後4年制の東京家政学院筑波女子大学の設置を経て、2005年に男女共学の筑波学院大学となりました。さらに、2010年に学部を経営情報学部へ改組し、現在に至っています。

この間、34年にわたって、日本を代表する研究学園都市・つくば市を中心とする高等教育機関、とりわけ市内で唯一の私立大学としての役割を果たし、多くの卒業生を社会に送り出してきました。

今回の大学名の変更と2キャンパス制は、筑波学院大学が従来以上に、国際的にも地域に対しても活躍できる「グローバル・ビジネスエリート」と呼ぶにふさわしい人材を育て、日本を代表する大学に発展させようという願いが込められています。

大学の2大使命といえる教育と研究の充実についてはこれまで、絶え間ない改革が行われてきました。

特に教育面においては2021年度から、グローバル化が進む時代において活躍できる人材を育てるために国際教養（ILA）コースを設けたほか、地域で活躍・貢献したい人材を育成するために公務員養成コースを新設しました。

その成果は徐々に実を結びつつあり、ILAコースの学生は米国有名大学への短期留学を経て、英語力の顕著な向上を果たしました。一方、公務員志望の学生の中には、志願者の多い茨城県内自治体の公務員（学芸員）試験に2023年秋に合格した学生が現れました。

以上のように教育内容の水準向上に努めてきましたが、大学名変更で一層の飛躍を図り、大学のさらなる発展を目指します。

グローバルな視野を持ちつつも、地域の抱えるさまざまな課題の解決に立ち向かえる人材である「グローバル・ビジネスエリート」の育成が、本学が取り組まねばならない務めです。

本学の21世紀型教育研究所は、教育内容の一層の充実に資するため、2021年4月に設置・発足しました。キャッチフレーズの一つとして「受け身の授業よサヨウナラ」を掲げて、大学教育の新たなコンセプト設定と実践について、取り組み方法を探

るとともに、深掘りをしていこうというものです。

具体的には、①大学における語学以外の授業を英語で行う「イマージョン授業」の展開②アクティブラーニングの一層の推進③高校との関係性を密にして高校から大学への「学び」を円滑化する高大連携の実現——などが挙げられます。

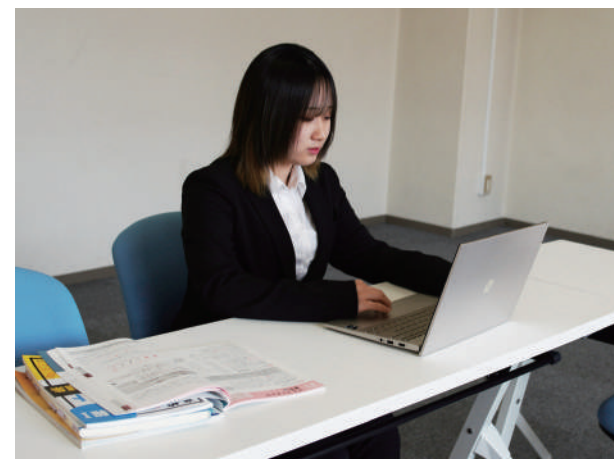
上記①についてはILAコースを中心に、外国人教授が担当する授業で、地球環境問題や哲学などについて「オールイングリッシュ」の講義が行われ、教員と学生が英語でやり取りする光景が当たり前になっています。

また、②については、アクティブラーニングを一層進めやすくするために2023年度から授業時間1コマを従来の90分から105分に改めて、教員と学生が双方向で討議したり、グループ学習をしやすいと、といった改革を進めています。加えて、教員が自分の授業の工夫を発表し、教員同士で討議し合う「授業研究会」を毎月開催しています。

さらに③は、2022年度から21世紀型教育研究所の教員が中心になって「高校生コンテスト」を開催し、ビジネスモデル作成や英語による世界遺産紹介など5分野に分かれて、夏休みを中心に、大学教員と高校生の協働作業により作品を仕上げ、出来栄を競うというものです。コンテストには茨城県内だけではなく、東京都内の高校からも参加者があり、高校における「探求の時間」とのコラボレーションを活用する例もありました。

2024年4月に大学名が日本国際学園に変わっても、21世紀型教育研究所の活動は引き続き行われ、その存在価値と活動内容の充実が求められていることに変わりはありません。むしろ、新学習指導要領で高校までに新たな教育を受けた世代を受け入れる高等教育機関としての大学は変わらねばなりません。その教育活動の羅針盤として、21世紀型のみならず22世紀型を見据えた教育の道筋を切り拓くのが使命であると信ずる次第です。

私事ですが、2024年3月をもって筑波学院大学学長と21世紀型教育研究所長を退任いたします。これまで当研究所の活動を支えてくださった方々と、温かく見守っていただいた方々に感謝申し上げますとともに、研究所への一層のご支援を、心からお願い申し上げます。



高校での授業サポート用資料を広げる飯島 綾乃さん

●担当した学年およびクラス数

1年生の全4クラスを担当しました。

●活動期間および頻度

授業ではパワーポイントとスプレッドシートを使って先生が説明を行い、生徒は先生の話を聞きながら実際に自分のノートPCを使って作業をしていました。私は生徒の様子を見て、PCの使い方が分からなかったり授業の内容がうまく理解できていなかったりする生徒を個別にサポートしました。

●活動中楽しかったこと、大変だったこと

授業を通じて生徒とコミュニケーションを取るの楽しかったです。授業時間以外に生徒と接する時間はなかなか取れなかったのですが、授業の前後に生徒が話しかけてくれて、大学やアルバイトのことなどについて話をしたりしました。短い期間だったにも関わらず生徒たちが私の名前を覚えてくれて、嬉しかったです。

大変だったことはあまりありませんでしたが、強いて言えば、授業の資料を事前にいただくことが難しく、事前準備が十分にできないまま授業に臨んでいたことです。しかしその分、授業中に生徒たちの様子を注意深く見ることができたと思います。

●先生を目指している理由

私はもともと人に何かを教えるのが好きで、妹や弟によく勉強を教えていました。また、小学生の頃から「先生」という存在が好きで、先生たちとも仲良くしていました。自分も先生を目指そうと思った直接のきっかけは、中学2年生の時の、担任の英語の先生とALTの先生との出会いです。担任の先生は生徒に寄り添うとても良い先生で、授業でも生徒を引き付けるのが上手でした。またALTの先生はとてもパワフルで面白い先生でした。このお二人に出会い、私も同じように人に寄り添う先生になりたいと思うようになりました。

●活動において心掛けたこと

人とにかく生徒に寄り添う形でサポートすることを意識しました。生徒たちはみんな真面目に授業に取り組んでいるのですが、PCを使うにあたって個人差が大きく、授業についていけない生徒は手が完全に止まってしまいます。わからないことがあっても先生を呼んだり質問したりして

筑波学院大学の学生による 学外活動紹介

高等学校での授業サポート 飯島 綾乃さん(経営情報学部4年)

茨城県教育委員会は、将来茨城県を支えるIT人材の育成を目指し、2023年度より「情報科社会人講師活用プログラム」と称して高等学校の必修科目である「情報I」の授業で大学生や社会人を活用した実践的な指導を始めました。本学も高校からの要請を受け、教職を目指している学生1名を竜ヶ崎第一高等学校に派遣しました。

ここでは、このプログラムに参加し高校での授業サポートを行った学生の活動について紹介します。

こない生徒が多いので、生徒の様子をよく観察し、手が止まっている生徒にはすぐにこちらから声をかけるようにしました。

●今後に向けて

以前行った教育実習では自分が主体となって授業を行い、今回の活動では生徒のサポートをしました。異なる方法で授業に関わることができたのは、とてもよかったと思います。また、今回の活動先は教育実習先と異なる学校だったため、学校による雰囲気や授業内容の違いを知るよい機会にもなりました。

今回の経験も踏まえながら、生徒の声に耳を傾け、生徒のやる気を支えられるような先生を目指したいと思います。



飯島 綾乃さん
経営情報学部4年、グローバルコミュニケーションコース所属
石岡第一高等学校出身



つくば21世紀教育フォーラム特集

絵画を通じて世界情勢について考える

トロプチン ニキタ ウクライナ人留学生
野田 美波子 筑波学院大学 講師

2023年12月12日から17日まで、つくば市民ギャラリーにて本学主催による「ウクライナの子どもたちの絵画展」およびトークイベントが開催されました。これは野田美波子講師を中心にデザイン系ゼミの教員や学生が企画・実施したもので、トークイベントにはウクライナ人留学生のトロプチン・ニキタ君が登壇しました。
今回はこのイベントで中心的役割を果たしたお二人に、お話を伺いました。

■ 二人の出会い

ニキタ君と野田先生と一緒に活動するようになったきっかけは

ニキタ：もともと僕はウクライナの大学の日本語学科で勉強していて、いつか日本に留学したいと考えていました。それで、ウクライナで戦争が始まって外国に避難するにあたり、ウクライナ人を短期プログラムではなく正規の学生として受け入れており、サポートもしっかりしている筑波学院大学に魅力を感じ、入学しました。

野田：私は以前からJIM-NET（日本イラク医療支援ネットワーク）とともにイラク支援の活動をしてきました。イラク戦争開戦から20年を迎えた2023年の3月にお茶の水でJIM-NETが企画展を開催したのですが、そこにニキタ君を誘ったのがきっかけですね。ニキタ君は当時まだ学部入学前でしたが、科目等履修生としてすでに本学で勉強していたので、この企画展に興味があるかなと思い、声をかけました。もともとは写真の展示が中心のイベントだったのですが、ニキタ君に参加してもらえることになったので、ニキタ君やご家族にウクライナについて話してもらってトークイベントもやったんですね。それをきっかけにして、その後も一緒にイベントをするようになりました。

■ 「ウクライナの子どもたちの絵画展」について このイベントを実施することになった経緯を教えてください

野田：この絵画展は、もとはJIM-NETの姉妹団体の日本チェルノブイリ連帯基金という、ウクライナ国境にあるチェルノブイリの原発事故で被害を受けた子どもたちの支援をずっと続けている団体が主催している企画です。去年の5月に東中野で行われた絵画展がとても素晴らしかったので、学内の共同研究の一環としてつくばでも開催することにしました。

ウクライナ紛争が始まって1年が経ちますが、やっぱり1年経つと忘れちゃうじゃないですか、人って。なので、ウクライナや世界で起きていることを学生だけでなく地域の方たちにも忘れないでほしいと思い、開催しました。特につくばはウクライナから避難されてきた方が結構多いので、そういう方たちの励みになってほしいという思いもありました。

絵画展では、ウクライナの子供たちが描いた絵を展示しました

野田：日本チェルノブイリ連帯基金が支援している避難先の子供たちが描いた絵画ですね。子供たちが自由に描いた絵です。ウクライナは絵画教育が盛んで、子供たちは日常的によく絵を描いているそうです。

子供たちの描いた絵を見て、どのような印象を受けましたか

ニキタ：子供たちの出身地を見ると私の出身のドニプロ州の子供が多くて、それでまず心が温くなりました。それから、戦争が子供たちの心に深く刺さっているという印象を強く受けました。いろいろな絵の中で、壊れた家がよく描かれている。よく見られたパターンは、絵の半分に平和な生活、もう半分に戦争の生活が描かれているものです。戦争でいろいろが変わってしまった、という意識がある。本当に苦しいんですね、子供たちは。僕たちが子供の頃はまだ戦争がなくて、平和な日常だったんですけど、この子供たちは子供の時代が奪われてしまったように思います。

野田：第一印象は、表現力がすごい豊かだな、ということですね。そのぶん、子供たちがすごく苦しんだり悲しんだりしてるのが強く伝わってくる。やはり子供などの弱い立場の人たちが一番つらい思いをするんだな、というのがダイレクトに伝わってきました。

子供たちはウクライナに対する強い気持ちを持っていて、絶対にこの戦争に勝つ、という意識が強く出ている絵がたくさんありました。ただ、そこでいう「勝つ」っていうのは、軍事的にロシアを打ち負かすとか多分そういう意味じゃなくて、日常を早く取り戻したい、というようなもの。やっぱり日常を壊されてしまったことは子供たちに大きな影を落としていて、どれだけその日常を子供たちが大事に思っているのかということ強く感じました。

■ トークイベントについて

絵画展では絵の展示だけでなくトークイベントも行いました
トークイベントでは、どのようなお話をされたのですか

ニキタ：ウクライナの文化を中心に、ウクライナの言語や音楽、世界遺産などについてスライドを使って紹介し、ウクライナはこういう国だ、というイメージを日本の方に持ってもらえるよう意識しました。ニュースを見ただけでウクライナという国をイメージすることは難しいですが、文化紹介を通じてウクライナに対するイメージの解像度を高めてもらうことで、もっと共感してもらえるのではないかと考えました。

トークイベントには、僕の他に筑波大学の留学生も3人参加しました。そのうちの1人は僕と一緒に発表をして、他の学生たちはオーディエンスの中に入っていたんですが、活発に意見を言ったり自分の経験について話したりしてくれました。

野田：筑波大の留学生たちがウクライナ語で話をして、それ



トークイベントでウクライナの歴史と文化の紹介を行うニキタさん

をニキタ君が日本語に翻訳してくれました。

イベントに参加した方たちの反応は

ニキタ：今回のイベントを通じて初めてウクライナに触れた、という方が多くて、皆さんの反応はとても良かったです。共感してくれた方も多かったと思います。会場が小さかったこともあり当日の参加者はあまり多くなかったのですが、新聞社が来て取材してくれたので、より多くの方に情報を届けることができて嬉しかったです。今回のイベントを通じて、ウクライナではまだ戦争が続いている、ということを確かに皆さんに伝えることができたと思います。

■ 学生たちの活動と学び

今回のイベント開催には、ニキタ君だけでなく本学の学生たちも関わっていました

野田：学生には、絵画展の準備全般に関わってもらいました。長野にある日本チェルノブイリ連帯基金の事務所まで行って絵画を選ぶところから始まり、額縁を用意して絵を入れ展示したり、宣伝用のチラシを作ったりと、さまざまな作業に本学のデザイン系ゼミの学生が関わっていました。

また、学生たちを対象に、子供たちの絵画を分析するワークショップも開催しました。自分が気に入った絵、気になる絵を選んで、その絵の前で自分が考えたことや感じた印象を話し、他の学生と意見を交わす。それを通じて、子供たちがなぜこのような絵画を描いたのか理解を深め、その絵画が持つ力について考える、というワークショップです。ただワークショップだけで終わるのは面白くないので、その様子を動画にして絵を描いたウクライナの子供たちに見てもらい、フィードバックをもらおうと、今準備を進めているところです。

ワークショップでの学生の様子はいかがでしたか

野田：みんな思ったことを口にして、かなり積極的でした。やっぱり絵画から伝わってくるものっていうのは本当に人それぞれで、学生たちも驚いていました。

意外なコメントもたくさんありました。例えば、月が出ていて、それと雲の形が目になっていて、そこに男の子が一人立っている「神の目」というタイトルの絵があったんですが、それを見た一人の学生が、この雲みたいなものは爆風の風じん、そこから目が見えて、月が出ていて、神様が自分を見ている、と言うんです。空にあるのがただの雲じゃなくて風じん、戦争と関係のある雲、という、そのような受け止め方をしているの

が面白かったです。また、猫がいっぱい描かれている絵があったんですけど、よく見てみると、すごく端っこの方に武器みたいなものが置いてある。一見可愛い絵なんだけれども、そういう、子供たちが引っこかっているようなものも描かれている。それから、この猫って何なんだろうね、という話もしました。猫をよく見てみると、猫にもランク分けがあって、猫の王様みたいなものもいる。また、絵画として描かれている猫もいて、その猫はもしかしたら戦争で亡くなった子供なのかもしれない。そんなふうに、思ったことを率直にどんどん言っていくんです。

学生たちは、よく見えています。絵を読み込んでいくことで、新しい発見もある。例えばスマホの画面が描いてある絵があって、そこに書かれているウクライナ語を翻訳してみると、「逃げて」とか「ここに避難して」みたいな言葉が出てくるんです。**ニキタ：**政府から配信されている空襲アラートのアプリですね。空襲があると交通も止まるので、ウクライナの人たちは常にそれを見ながら生活しています。

■ 今後に向けて

ニキタ君は4月から2年生ですが、この大学にいる間にどんなことをやってみたいですか

ニキタ：僕は今、茨城県国際交流協会の留学生親善大使としてウクライナに関する活動をしているので、それはこれからも続けていきたいと思います。また、先日日本語スピーチコンテストで司会をしたのですが、そのような機会も今後増やしたいです。あとは、今やっているウクライナ語の通訳や翻訳の仕事やボランティアも続けていきたいと思っています。

先生は本学の学生に対して、これからどんな経験をさせていきたいとお考えですか

野田：やはり定期的にウクライナの情報を伝えていくような活動を学生と一緒にやりたいと思います。本学にニキタ君がいるということ自体が何かの縁だと思うので。今回のような絵画展をもう一度やってもいいし、ウクライナ関連のイベントをやってもいいですね。

デザインや絵画というのは、世界の情勢について考える際の有効的な手段だと思います。ウクライナの問題について考えるにしても、入口がいきなり戦争だと一歩引いてしまう方も多いので、まずはデザインとか美術とか絵画という入口から入っていくのがいいのかな、と思います。

授業研究会報告

本学では学内でアクティブラーニングなど新たな教育の手法を共有するという観点から、全専任教員を対象とした授業研究会を毎月1回実施しています。研究会では発表者が報告する授業実践の工夫や課題について、教員たちが活発な議論を交わしています。今回は2023年度4月～9月開催の研究会について報告します。



古家 晴美 教授

【略歴】筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科修了、東京家政学院筑波女子大学講師、筑波学院大学准教授・教授
【学位】筑波大学 文学修士
【専門分野】民俗学・文化人類学

■大学教育におけるアクティブラーニング(2023年4月27日開催)

今回の授業研究会では、大学教育におけるアクティブラーニングの方法について発表した。①教材を使用した発見学習、②ブレインストーミング、KJ法、③フィールドワーク、④イベントへの企画立案、⑤外部への発信などが挙げられる。

その中でも、特にフィールドワークは、地域を理解するアクティブラーニングとして有効であると言える。既存の文献資料やデジタル情報以外に、学生独自のテーマを設定し、それに基づいた質問項目を作成するためである。

この際、すでに明らかになっている情報から派生した質問と、新たな関心から生じた質問がある。特に後者に関しては、学生目線を生かしつつも、より具体的な内容に踏み込んだ質問が出来るような指導を心掛けている。

また、事後のフィードバックについては、内容が独善的なものでないか、どうしてそのように解釈したかについての振り返りを十分に行うよう努めている。



「アクティブラーニングと地域振興」の発表を行う古家 晴美 教授



パンタ ボーラ 准教授

【略歴】：国立天文台専門員、情報通信研究機構技術研究員、東京大学地震研究所学術支援専門職員
【学位】：電気通信大学 修士(工学)
【専門分野】：ネットワーク、ネットワークセキュリティ、データベース、数理モデリング、データサイエンス

■ ICT業界の実務経験から教室まで(2023年6月1日開催)

私は、国立天文台のチリ観測所(ALMA)、情報通信研究機構(NICT)、東京大学地震研究所などを経て、2021年度から筑波学院大学で情報学分野の教員になりました。

情報・技術の進歩、特にインターネットなど通信技術の進捗で人々のライフスタイルが大きく変化してきています。このような背景と変わりゆく社会の中で、教員としては、情報科学を構成する要素を理解し、実生活の中で、或いは研究活動のために情報リテラシーの能力の修得を目指しています。情報に溺れている社会事情の中、学生の問題を解決する能力を引き出し、21世紀を生きるためにICT分野の必要なコンピテンシーを有する人材を輩出するために努めています。

授業では教科書、参考書、講義ノートに書かれた内容をベースにして、様々な業界の実例を挙げながら学生には履修している科目の応用の面も知ってもらいます。小テストやレポート提出の時に技術的な内容のみではなく、表現力、プレゼンテーション力も磨くように指導しています。



荒幡 克己 教授

【略歴】東京大学農学部卒、農林水産省行政官(大臣官房企画室等)、岐阜大学農学部教授
【学位】東京大学 博士(農学)
【専門分野】ミクロ経済学、公共経済学、農業経済学、社会経済史

■ どうする荒幡先生？ 教育方法の模索 アクティブラーニングで悩み、期末テストで悩み、--- 未だに迷う毎日(2023年7月27日開催)

私が大学で教えるようになってから、約30年が経過したが、未だに、模索の日々が続いている。以下では、紙幅の制約もあるので、「期末試験等の方法」に絞って論ずる。

試験をやるか、レポートにするかは、それぞれ一長一短があり、また、科目の性格にもよるので、ここでは論点としない。試験をやる前提で考えると、三つの論点がある。

第一に、「持ち込み可か否か」については、社会科学科目が「暗記もの」として間違って理解されていることへの反発から、持ち込み可とし、問題量は比較的多めとしている。

第二に、「中間試験もやるか否か」については、中間試験派である。理由は、テストを採点して返却する際の解説で、理解度が深まり、学習効果が上がる、と期待できるからである。

第三に、「選択式か、記述式か」については、第一の論点との関係で、選択式を採用している。いずれの論点ともに、それぞれ短所、長所がある。私自身も、今後とも、先輩、後輩の体験に耳を傾けつつ、改善を続けていきたい。



濱西 隆男 教授

【略歴】総務庁、総務省、尚美学園大学
【学位】京都大学法学部卒
【専門分野】行政法・地方自治法・情報法

■良い授業を目指し試行錯誤の日々(2023年8月31日開催)

高校の授業と比較して、大学の授業の変化は非常に大きいように思われる。例えばシラバスの事前提示、講義レジュメの配布・視聴覚機器の活用、成績評価の統一基準・GPAによる全体的な成績評価の目安、学生への授業アンケートの実施等は、以前は行われていなかった。こうした大学の授業の劇的な変化について、高校の授業によく追いついたという評価もできよう。しかしながら、高校卒業後の生徒の進路が大きく変わり、就職者が減少した分、大学・専門学校への進学者が増加したことが大きく関係していると考える。その結果として、入学時に学生の基礎学力の引上げ等の対応が求められるようになった。また、卒業時には企業側から学生の質が問われるようになり、4年間の大学教育を通じた学生の質の確保の対応が求められるようになった。こうした課題に直面して、大学教員は、日々の授業での対応を求められることになった。私も、授業目標を学生が専門的知識を習得した上で、自分で考えて一定の解答を提出できることと定め、当該目標を達成できる授業を「良い授業」と設定して、それを目指して試行錯誤を続けている。



中野 千秋 教授

【略歴】東北大学経済学部卒業、慶應義塾大学商学研究科修士課程・博士課程終了、米国ジョージワシントン大学博士課程終了
【学位】経済学士、商学修士、Ph.D.(学術博士)
【専門分野】経営倫理学、組織行動論

■ My Challenge @TGU(2023年9月28日開催)

まず簡単な自己紹介として、中野の経歴や業績の概略を紹介した。次に、現在の担当科目それぞれに関する中野独自の「ティーチング目標」を紹介すると共に、着任(2021年度後期)以降の授業評価アンケート結果一覧を提示し、学生による評価の平均点や学生のコメントについて言及した。

本題の授業運営方法については、特に「経営哲学」という科目を取り上げた。中野はもともと授業で動画を多用することについて批判的であったが、この科目に限っては経営者の生の声を学生により良く届けたいという思いから、あえて動画を多用する授業計画を策定した。この中野のチャレンジの成果について、「ある学生の成長記録」として、当該学生の提出課題(授業感想文)を数点投影し、1学期間の授業の中で、その学生がどのような気づきを得て成長していったかを考察した。中野としては、この動画多用の試みに一定の成果が認められると自負している。

最後に、①授業で動画を多用することについて、②動画等の日本語を十分に理解できない留学生への対応について、授業研究会の参加者に意見を求める形で発表を締め括った。